

# 市史だより

F u k u o k a

27

史的再発見マガジン  
[シシダヨリ・フクオカ]

Spring 2024

TAKE FREE

特集

山に臨み、  
山から望む

—香椎・下原—

contents

- 07 連載コラム「タイムマシンでとなりの駅へ」
- 08 「新修 福岡市史」ナナメ読み
- 09 市史編さん室トピックス
- 10 新連載「ぶくおか観光めぐり」
- 12 市史だよりコラム「市議会史」ってどんなもの？

特集

# 山に臨み、 山から望む

## 香椎・下原

人々による利用と保護の波に翻弄され、その意味合いを変転させた山。福岡市の東端にそびえる立花山がたどった歴史。

文＝市史編さん室



博多駅から北に向かって一〇分ほど鉄道にゆられると香椎駅に到着します。ミステリ好きの方には松本清張の推理小説『点と線』（一九五八年）の舞台と言えば分かりやすいでしょうか。駅周辺は、令和三（二〇二二）年に大規模な区画整理事業を完了し、東区の中心的なエリアとして発展を続けています。一方、駅の東側に目を移すと、立花山をはじめとする山々がすぐ近くまで迫っており、豊かな自然を残しています。今回は変化し続ける街を見守ってきた「山」に着目して、香椎周辺の歴史を追っていきたいと思います。

### ○ 先史時代の人々の営み

香椎周辺では、古くから人が暮らしていま

た。国道三号博多バイパス建設に伴う発掘調査では、旧石器時代の石器や縄文時代の土器が見つかりました（香椎A遺跡）。また、遺跡の土にはカシヤシイの仲間の花粉が含まれていたことから、この周辺には食料となるドングリが採れる照葉樹林が広がっていたことがわかりました。そして、時代が進んだ弥生時代の土からは栽培植物であるイネが、丘陵部の調査では弥生時代終末〜古墳時代初頭の子供の遺体を埋葬するための甕棺（小児甕棺）が、谷部からは弥生時代中期頃の細形銅矛が見つかっています。この時期の建物の跡は確認されていないので集落があったかは不明ですが、この地で古くから人々が活動していたのは確かなようです。

### ○ 高き岳から新羅を望む

香椎という地名は、古代の歴史書『古事記』『日本書紀』に、第一四代仲哀天皇の滞在場所である行宮「檀日宮」として初めて登場します（『日本書紀』巻第八、『古事記』中巻）。

檀日宮で仲哀天皇は、船や水田を献上すれば海に向こうの新羅を服属させよう、という神託を受けます。しかし、その言葉に疑念を抱き、従わなかったことでまもなく崩御します。その後、妻の神功皇后は神託に従い、海を越えて新羅に渡ったとあります。一連の記述の真偽はともかく、天皇の命で編さんされた書物にこのような形で登場したことは、香椎にヤマト政権の拠点の一つや、そ



1 香椎村周辺の明治期の地形図。現在より海岸線が内側にあり、山が迫っている。城ノ越山には長谷ダムがあり（1993年竣工）、大部分がダム湖「三日月湖（みかづきのうみ）」となっている  
 2 香椎A遺跡で出土した細形銅矛（弥生時代中期）。先端部が折れており、現存長は15.2cm。西区の吉武遺跡群大石地区の甕棺副葬品と似ており、有力者の存在をうかがわせる  
 3 香椎B遺跡から出土した軒瓦。写真のような草花文がある瓦は博多や箱崎で多く見つかっており、これらは12・3世紀に禅宗寺院や宋人居住域で使われたと考えられている  
 4 香椎B遺跡で見つかった板碑の拓本。碑面上部中央に大日如来の種子（梵字）、その下に「應永六己卯」「禪尼妙知」「拾月拾四日」の銘文を刻む。應永六年は西暦1399年にあたる  
 5 報恩寺（上）。寺は天正年間の兵火で焼亡後、観音堂・薬師堂を残すのみとなったが、昭和戦前と戦後の二度にわたって再興され、栄西ゆかりの菩提樹（下）が植えられた



香椎宮には、古くから神仏習合の思想に基づき一五の神宮寺（天台宗）が境内や周辺にありましたが、十二世紀末からある人物に関連して新たな寺院が立て続けに建立されます。その人物とは、中国（南宋）へ二度（①一一六八年、②一一八七～九一年）渡り、日本に禅宗（臨済宗）を伝えた栄西（二一八五）年の創建（香椎宮蔵「香椎宮編年記」）。報恩寺（建久報恩孝光禅寺）は建久三（一一九二）年南宋より帰国した栄西が、香椎宮の側に建てた寺院（『元亨釈書』巻第二、「香椎宮編年記」）。宝積寺は栄西の弟子の行勇が建てた寺です（『香椎宮編年記』）。

れに附属する港があったことをうかがわせます。仲哀天皇が神託を疑った理由は「高岳」に登ったものの、大海が広がっていて国などは見えなかったためでした。この「高岳」とは、香椎一帯で一番遠くまで見通すことができた「立花山」のことだったと考えられます。ちなみに、現在でも立花山からは、気象条件がよければ計算上は対馬（長崎県）までは見えるそうです。

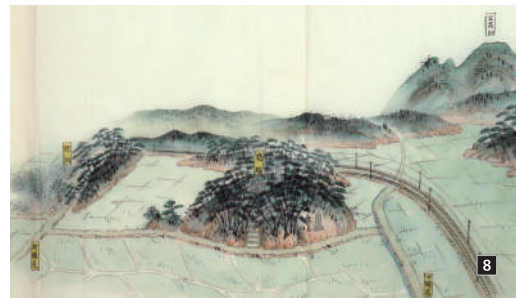
### 山裾の寺院群

禅宗との関係では、香椎宮の東にあたる生水寺地区では、一部不明な時期はあるものの、十二～十五世紀にかけて禅宗寺院があったことがわかる。「禪尼妙知」などの文字が刻まれた板碑や軒瓦が確認されています（香椎B遺跡）。このように立花山のふもと香椎宮周辺で展開した禅宗寺院は、しかし、江戸時代にはすでになくなっていったようです。具体的な廃絶の時期は不明ですが、文明十二（一四八〇）年に北部九州を訪れた連歌師の飯尾宗祇が戦乱で焼けた香椎宮周辺の寂れた様子を「筑紫道記」で記しています。発掘成果からも、十六世紀には寺院の遺構を確認することができず、江戸時代に入ると水田が広がっていたことがわかっています。

また、一五あった神宮寺も、天正十四（一五八六）年の島津氏の侵攻により焼亡します（『香椎宮編年記』、『福岡県地理全誌』一九）。神宮寺は江戸時代中期に再興された護国寺のみとなりました。

現在の福岡市域の東端に位置し、東区・新宮町・久山町にまたがる立花山は、西は博多湾や福岡平野、東は遠賀・宗像地域を見渡せる場所でした。そのため、昔から防衛上の重要な拠点として機能しました。この立花山に城を築いたとされるのは豊後国大友氏の一族で立花氏の祖となった大

### 城をめぐる攻防



6 立花山城イバナラ地区の小早川期の石垣

7 寛文7(1667)年の絵図に描かれた立花山の様子(「大里(門司)より長崎までの道程図」(部分)。「立花山古城」とある。周辺の山々と比べて緑が生い茂っていることから、すでに「御山」として樹木の利用が制限されていたことがうかがえる。8 兜塚から立花山を望む(「香椎宮名所旧蹟指定願控 兜塚之図」)。御猟の際には遠見番所が設定されたが、その一つが浜男の兜塚。図では鉄道が走るが、多くの自然が残る。江戸時代と変わらないであろう風景がうかがえる。9 現在でも三日月山山頂からは四王寺山や宝満山を見渡することができる

友貞載(？〜一三三六)です。大友氏は文永十一(一二七四)年の元寇後、香椎周辺の防塁築造を担当しており、それをきっかけにして筑前に進出してきていたのです。

防衛拠点は立花山だけにとどまりません。その南側には三日月山、城ノ越山といった山々が連なり、尾根上に土塁や石垣が築かれました。これらは立花山城と密接に関わる施設と考えられており(「福岡県文化財調査報告書」二五〇集)、立花山城は福岡市内最大級の規模を誇ります。また、香椎宮の北東五〇〇メートルほどにある標高九一メートルの御飯ノ山からも城館の跡が発見されています(「福岡市埋蔵文化財調査報告書」六二二集)。

戦国時代には、大友氏は筑前国の領有をめぐって毛利氏と激しい抗争を繰り返します。それらの戦で主要な働きを行った一人が大友氏重臣の戸次(立花)道雪です。道雪は元龜二(一五七一)年に立花山城主となり、同城を中心に各地の戦で活躍します(『博多筑前史料 豊前覚書』)。その道雪の養子の宗茂は、天正十四年の島津氏との攻防戦で味方勢が敗北するなか、立花山城を守りきった上に敵城を陥落させる働きをみせます。豊臣秀吉からは「誠九州之一物也」との高い評価を受け、翌年に筑後国山門・三潴・下妻・三池の四郡を拝領しています(『柳川市史 史料編V 近世文書(前編)』)。このように眺望に優れた立花山城は重要な軍事

拠点であったため、城を中心とする一帯では幾度も戦が繰り返りひろげられました。

## 山は誰のもの？

いつの時代も、山は食料・薪の調達や建築資材の確保など、生活に直結する形での様々な利用が見込まれました。また、前近代の農業は主として草木を肥料(草肥)としたため、山はそれらを調達する場所としてもとても重要でした。

しかし、江戸時代になると、良材となる木が多く繁る山や、藩主が狩場とした山などは、藩が管理する「御山」と呼ばれ一般の利用は禁止されました。なかでも、藩主の遊猟を目的とする山は「留山」と呼ばれました。

慶長十一(一六〇六)年、福岡藩主・黒田長政は領内の一三箇所を留山とします。立花山もその一つです。立花山はこの時代、下原村(現東区下原ほか)の村域の一部でした。留山には、許可証を受けて代価を納めれば、狩猟や竹木の伐採が認可される場所もありましたが、立花山では江戸時代を通じて禁止されていました。

香椎・浜男・唐原・下原の四か村にある山林の八割以上は、藩の管理、または藩士が拝領した山でした(『福岡県地理全誌』一九、二〇)。つまり、この四か村が生活のために利用できた山林は全体の面積の二割程度だったのです。

## ○ 御猟と村

藩主や藩士が行う「御猟」も住民の負担でした。明治元（一八六八）年十月、「少将様（黒田長知）の御猟が立花山で行われた際には、まず、長知が滞在する本陣のほか、家老や大組・馬廻組の諸士、郡奉行などの宿所二三か所が村人の各家に割り当てられました（中尾文書九二七「少将様立花山御猟達御宿々御手当割込帳」。香椎・三苦・下和白・唐原の各村の各宿では、床に敷いたり獲物の肉を包んだりするための菰（八六枚）、獲物をつり下げるための縄（二束）、宿や外で使う薪（一五七メ）・松明（五〇丁）を購入し、夜着・布団（一〇〇ずつ）、吸物膳碗・奈良茶（各五〇人前）、枕・行灯・火鉢・燭台などが集められました。また、仕留めた猪や鹿を掛けるための杉丸太（八本）も用意しており、物品や獲物の運搬、宿での給仕や掃除などを行うための人夫は総勢一三六人も集められています。また、この御猟では猟犬が八〇匹準備され、さらに犬のための宿が唐原村に二〇軒割り当てられました（中尾文書八三六「少将様立花山御猟達入用諸品買立物仕廻目録書上帳」。唐原村は当時の戸数が六六軒ですので、実に三分の一ほどの家が猟犬の宿になったことがわかります（中尾文書八三六、『福岡県地理全誌』一九）。

また、具体的な年代は分かりませんが、立花山

で二日間かけて行われた別の御猟では、周辺の村々に対して夜具や家具の調達と七五人の人夫を集めるように通達が出されました。それに加え、炊き出しのためでしょうか、鶏六羽、干大根四〇〇本、里芋三升も集めるようにとの指示が出ています（中尾文書六七四～六八五「書状」）。

山での御猟は周辺の村民にとつては農作物に被害を与える猪や鹿の駆除という点でありがたい一面はあるものの、宿の手配や人夫・物品の調達を行わなければならない、大きな負担がかかりました。

## ○ 山をめぐる訴訟

明治に入ると、山をめぐる状況は大きく変わります。明治二年の版籍奉還によって幕府や藩が所有した山林の多くが「官林」として明治政府のものとなったのです。一村単位あるいは複数の村々で共同利用していた山の場合は、引き続き村による管理が認められる場合もありましたが、官林として引き上げられる山もあり、その対応には差がありました。そのため、下げ戻しを求める裁判が全国で行われました。

明治三十二（一八九九）年、明治政府はそうした裁判を整理するため、一部の国有林の下げ戻しを認める「国有土地森林原野下戻法」を發布し、対応にあたりました。

福岡藩の「御山」であった立花山も官林に編入

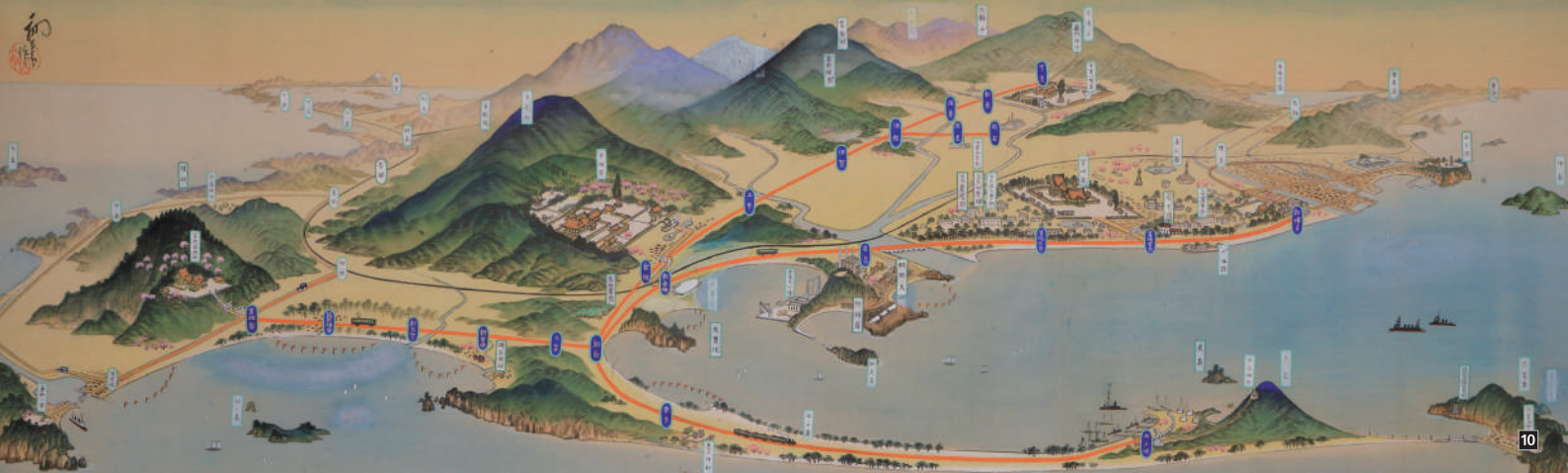
された山でした。しかし、明治二十二年に香椎・浜男・唐原・下原が合併して発足した香椎村は、立花山に隣接する周辺の村々と共同で、山林の下げ戻しを求めて裁判を起しました。結果は下げ戻し不許可となります（『行政裁判所判決録』第三三輯）が、判決を不服として審理は行政裁判所にもちこまれました。

香椎村は裁判で、福岡藩の山の基本台帳である「御山帳」に立花山は「御山」と記されるが、旧下原村が所有していた「抱山」である、と主張します。具体的には、立花口村（現新宮町）・原上村（同上）・下原村の三か村が明和七（一七七〇）年以前から自分たちで植林や樹木の管理を行い、それ以降は郡内から人足を出して山を管理していたという証拠を示したのです。そして、福岡藩の植林奨励策では自前で植えた樹木の半分が下げ渡されるだけでなく、木が生える土地の所有権も付与された歴史があったことを主張し、明治政府へ抗弁しました。

しかし政府は、「御山帳」に「御山」とあれば藩有の山であるとの主張を変えず、明確に私有地であることを証明できなかつたとして香椎村の訴えを棄却しました。

## ○ 観光名所となった山

国有林となった立花山には、昭和三（一九二八）



10 「大正の広重」と呼ばれた吉田初三郎が昭和初期の精屋郡一帯を描いた「博多湾岸鉄道沿線鳥瞰図」。中央左にひととき大きく描かれているのが立花山と香椎宮。朱線は「湾鉄」の愛称で親しまれた博多湾鉄道汽船の鉄道路線。「湾鉄」は石炭を輸送するほか、精屋郡内の主要な神社を結び参詣鉄道としても機能していた

11 昭和39(1964)年8月、新しく建った博多駅ビルから立花山方面を撮影した写真。周辺に高層建築が少なかった当時、立花山は市内のあらゆる場所から見えた

12 立花山の山頂(標高367m)地点は展望台となっている。駐車場がある登山口もあってアクセスがしやすく、登山初心者にも比較的登りやすい山として近隣から多くの人が訪れ、山頂からの眺望を楽しんでいる

年二月七日に天然記念物に指定されるクスを中心とした保護林をはじめ、下原側にはクス、シラカシ、タブ、アカマツ、マタケなどによる水源涵養保安林が残されることとなりました(国立公文書館蔵「福岡営林署福岡事業区森林調査簿」)。

戦後になると、豊かな自然が残された立花山は登山やハイキングの場として注目されることとなります。昭和二十八(一九五三)年に刊行された『香椎町誌』では、すでに現在と同じような観光(ハイキング)コースが設定されていて、香椎宮をスタートして三日月山、立花山を通り、新宮へ抜けるAコースと、下原から立花山・三日月山を巡り、香椎宮、香椎駅へと至るBコースが紹介されています。「頂上に立てば博多駅、玄界灘の眺望広く楠の太木が多い」(福岡)刊行会『福岡』(ビュースポットになっていたのです)。

仲哀天皇は「高岳」から遠く新羅を見渡そうとしました。香椎周辺の山々は、それぞれの時代においてその意味合いを変えながら人々に守られてきたといえます。その遠くへだてて歴史がつむがれた結果が、上古と同じ「眺望」にたどり着いたことは、歴史の面白さを存分に物語っているといえるでしょう。

【参考文献】伊東尾四郎校訂『筑前国統風土記』(文献出版、2001年) ● 大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎編『中世都市・博多を掘る』(海鳥社、2008年) ● 『香椎町誌』(香椎町役場、1953年) ● 『香椎町年代記』(香椎町役場、1955年) ● 河島悦子『大里から博多へ そして唐津へ 唐津街道』(海援社、1999年) ● 川添昭二・福岡古文書を読む会校訂『博多・筑前史料 豊前覚書』(文献出版、1980年) ● 『行政裁判所判決録 第三十三輯』(行政裁判所蔵版、中央大学、1923年) ● 黒板勝美『新訂増補 國史大系 31 日本高僧傳要文抄 元亨釋書』(吉川弘文館、2000年) ● 『群書類従・第十八輯 日記・紀行部』(続群書類従完成会版、平文社、1983年) ● 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注・訳者『新編日本古典文学全集 2 日本書紀①』(小学館、1994年) ● 小島憲之・木下正俊校注・訳者『新編日本古典文学全集 7 萬葉集②』(小学館、1995年) ● 『福岡県史 近代史料編 福岡県地理全誌(一)』(福岡県、1988年) ● 『福岡県史 通史編 福岡藩(一)』(福岡県、1998年) ● 『福岡県史 通史編 福岡藩(二)』(福岡県、2002年) ● 福岡県文化財調査報告書第250集『福岡県の中近世城跡2(筑前地域編2)』(福岡県教育委員会、2015年) ● 福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第621集『香椎B遺跡』(福岡市教育委員会、2000年) ● 福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第622集『香椎A遺跡2』(福岡市教育委員会、2000年) ● 福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第1186集『香椎B遺跡2』(福岡市教育委員会、2013年) ● 本間洋一注釈『本朝無題詩全注釈二』(新典社、1993年) ● 松波秀実『明治林業史要 上巻』(原書房、1990年) ● 森田隆明・宮川洋・長洋一・新原正典編『古代・中世の香椎 上巻』(権歌書房、

2012年) ● 森田隆明・宮川洋・長洋一・新原正典編『古代・中世の香椎 下巻』(香椎宮編年記)(権歌書房、2013年) ● 『柳川市史 史料編V 近世文書(前編)』(柳川市、2011年)

【参考資料】九州歴史資料館所蔵/中尾文書 674 ~ 685 [(書状)] / 中尾文書 836 [少将様立花山御猿達入用諸品買立物仕廻目録書上帳] / 中尾文書 927 [少将様立花山御猿達御宿々御手当割込帳] ● 国立公文書館蔵「福岡営林署福岡事業区森林調査簿」

【所蔵】香椎宮 ▶ P.4 6 ● 市史編さん室 ▶ 表紙・P.3 5・P.4 9・P.6 12 ● 福岡市埋蔵文化財センター ▶ P.3 3 ● 福岡市博物館 ▶ P.4 7・P.6 10・11 ● 山崎龍雄 ▶ P.4 6

【転載】福岡市教育委員会編『香椎A遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1145集(福岡市教育委員会、2012年) ▶ P.3 2 ● 福岡市教育委員会編『香椎B遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第621集(福岡市教育委員会、2000年) ▶ P.3 4

【作成】P.3 1 ▶ 1904年発行2万分の1地形図「博多」(青柳)(大日本帝国陸地測量部、「正式二万分一地形図集成」(柏書房、2001年)に所収、地理院地図(電子国土web)を基に加工

# タイムマシンで となりの駅へ

— 近過去への旅 —

最終回

文＝有馬 学 (福岡市史編集委員会委員長／福岡市博物館総館長)

## 歴史の遠近法

望遠レンズは遠くのを拡大して見ることができるが、同時に遠くのもの同士の距離感がつかみにくくなる。実際にはお互いかなりの距離を隔てているのに、すぐ近くに接近しているように見えるのは、多くの人が経験しているところだろう。マラソンのテレビ中継で、遠くの集団を望遠で見せられると接近した競り合いに見えるが、高い位置から俯瞰したカメラに切り替わると、まだかなり距離が開いていて、なあんだと思うことがある。

望遠レンズを通しての錯覚は空間的距離の話だが、時間的距離についても、すなわち現在から過去を眺める場合も似たような錯覚に陥りやすい。いまの若い人にとっては、現代から見た昭和と明治の距離感といわれても、同じような遠い昔としか思えないかもしれない。

ならば、現在と遠い昔の間の距離感はつかめているだろうか。遠い昔の人なら、現在の私たちとは異なる価値観、歴史観、死生観や身体感覚の持ち主であることは当然だろう。しかしややもすると私たちは、現在の私たちのものの見方を平気で過去に持ち込んで、歴史を理解したつもりになっているのではないか。

なかむらくさた お  
中村草田男のよく知られた句、「降る雪や 明治は遠くなりけり」は昭和6(1931)年の作だそう。明治34(1901)年生まれの草田男にとって、「明治」は幼少年期だ。句を詠んだ昭和6年からの距離は、誕生まで遡っても30年にすぎない。「遠くなりけり」から人が想像するのは、ずいぶん距離感が異なるのではないか。

しかしその30年における人の意識や社会の有り様の変化の量は、私たちが現在の地点からさかのぼる30年よりも間違いなくずっと大きいと思う。現在30歳の人が自身の幼少期を思い出して、世の中ずいぶん変わったものだと感慨にひたるのだろうか。昭和20年生まれの私には想像するしかないのだが、変わったとしても、その差は草田男の明治とは比較にならないほ

ど小さなものではないか。

そのような人にとって過去(自身が体験した過去だから近過去ということになる)とはどんな存在なのだろうか。私の関心はそこにある。この連載の奇妙なタイトルは、そのことを表現したつもりだ。巨大な望遠レンズを通して、はるか彼方の過去を精緻にながめる。それは歴史の冒険だろう。しかしそのとき、過去と過去の距離は見えていない。それを修正する方法はあるだろうか。

近過去を見るのが、そのトレーニングになるのではないか。なぜなら、近過去は私たちの体験そのものであったり、体験者が身近にいたりする。過去の距離感を経験的に計ることが可能であるか、少なくとも想像する手がかりを持つことができる。だから誤差の修正が可能かもしれないのだ。

そのような遠近法を通して、すぐ近くにあったと思われたものが、意外に離れたところにあったり、逆に時間をへだてて変わっていてもよさそうなものが、案外に代わり映えがしないように見えるという認識の誤差を、測定してみることが可能になるのではないか。

来年は昭和100年、戦後80年である。近過去の旅にはうってつけのタイミングだと思う。

(この連載は、今回をもって一区切りとします。またどこかで、過去と現在を行ったり来たりしながら、時間のレンズを通して地域を考える試みを続けてみたいと思います。)



# 新修 福岡市史 ナナメ読み

その7 資料編 考古1・2 遺跡からみた福岡の歴史 西部編・東部編

今回の  
ナナメ読みは

## 膨大な発掘調査報告書を

## 素早く読み解くインデックスに

福岡市は国内では発掘調査報告書をもっとも多く発行している自治体として知られています。その数はなんと一四九三冊（二〇二三年三月末時点）に達します。数年前まではこれら膨大な報告書を一冊ずつめくって調べる必要がありました。二〇一五年六月からは奈良文化財研究所のデータベース「全国遺跡報告総覧」で日本全国の発掘調査報告書を検索できるようになりました。

ただ、ピンポイントで調べたいことに到達できるのは良いのですが、その遺跡の重要性や周辺地域を含めた時代ごとの特徴については、前提となる知識がないとまだまだわかりにくいのが実際です。なぜなら、一般的な発掘調査報告書では、ある遺跡の限られた調査範囲について古い時代から新しい時代までの調査成果を紹介しているため、その遺跡全体を知るためには他の調査地点の報告書を

全部当たる必要があります。また、ある時代の福岡の遺跡について知りたいと思ったら、一四九三冊ある報告書からその時代の記述を拾い集めるという膨大な作業を行わなければなりません。さらに、調査年代や担当者によって報告書のフォーマットは微妙に異なっているため、これらの報告書を読み解くには慣れや専門知識が求められました。

福岡市の発掘調査報告書から必要な情報を読み取る作業は、例えるならば、様々な料理人が色々な調理法で作った数千本の串焼きを集めて、バラバラになった元の具材をきれいに復元するような作業といえるかも知れません。

そこで『新修 福岡市史』では、福岡市域を東西に分けて、各時代の主要な遺跡を四〇二〇ページ程度で説明する資料集を作りました。この二冊の資料編では、専門家や実践

に発掘を担当した市職員にあらためて遺跡ごと、時代ごとの整理を行ってもらい、定形のフォーマット（①調査の歴史、②遺跡の重要性、③遺構・遺物、④遺跡の年代、⑤遺跡の現状、⑥主要参考文献）に情報を落とし込んでもらいました。

とくに注目していただきたいのが、ひとつひとつの遺跡に付けられた「キャッチコピー」です。十数文字で表現された遺跡の特徴はどれもとても分かりやすい言葉でまとめられています。個人的に印象に残ったコピーは『「たて」から『よこ』へ』（老司古墳／古墳時代、東部編）と『飯盛山麓の官宮製鉄所』（都地遺跡ほか／古代、西部編）でしょうか。

気になった方はぜひ本書を手にとってみてください。考古学の奥深い世界（Ⅱ「沿」）が皆さんの訪れを待っています。



「資料編 考古1」(西部編)  
A4判 上製本(函入り) 883頁  
5,000円(税込)



「資料編 考古2」(東部編)  
A4判 上製本(函入り) 897頁  
5,000円(税込)

### 電話申込み・店頭販売

福岡市博物館 ミュージアムショップ (福岡市早良区百道浜 3-1-1)  
☎ 092-823-2800

### 店頭販売

政府刊行物 福岡市役所内サービスステーション  
(福岡市中央区天神 1-8-1 福岡市役所 地下1階) ☎ 092-722-4861

ジュンク堂 福岡店 (福岡市中央区大名 1-15-1 天神西通りスクエア1~3階) ☎ 092-738-3322

丸善 博多店 (福岡市博多区博多駅中央街 1-1 JR博多シティ 8F) ☎ 092-413-5401

### お問い合わせ先

福岡市博物館 市史編さん室 (福岡市早良区百道浜 3-1-1)  
☎ 092-845-5245





レポート

## 福岡市史講演会を開催しました

市史編さん室では、毎年1回のペースで「福岡市史講演会」を開催しています。令和4年度は3月、今年度は12月にそれぞれ福岡市博物館講堂で講演会を開催しましたので、その様子をお伝えします。

### 第17回「西島伊三雄と都市福岡のデザイン」

令和5年3月4日(土) 午後1時～4時半

2023(令和5)年は、福岡を代表するグラフィックデザイナーであり「博多町人文化連盟」など博多の伝統文化の継承にも尽力された西島伊三雄さん(1923-2001)の生誕100年に当たります。これを機に改めてその業績を振り返り、それらが福岡のイメージ形成に与えた影響を考える講演会を開催しました。

講師には、ご子息でありその活動も継承されているアトリエ童画の西島雅幸さんをはじめ、西島伊三雄さんと長く交流があり、教育者としての姿もよく知る大庭香代子先生(専門学校日本デザイナー学院九州校校長)、『風の街 福岡デザイン点描』(花乱社、2017年)の著者で、福岡のデザイン・広告業界の歴史にも詳しい武田義明さん(新天町・ギャラリー風代表)、そして経済地理学の視点から福岡の広告業界に関する論文も著されている古川智史先生(松本大学大学院総合経営研究科・総合経営学部専任講師)の4名をお迎えしました。西島さんや大庭先生のお話は貴重なエピソードが満載で、西島伊三雄さんの活動の根底にあるお人柄を充分に知ることができました。そして武田さんは戦前・戦後の福岡のデザイナー(凶案家)たちの活動と、西島伊三雄さんが果たした役割について解説くださり、古川先生からはお三方のお話を踏まえつつ、より客観的に福岡の広告・デザイン業界を俯瞰して見えてきた特徴について、調査成果とデータを用いたお話を聞くことができました。

最後に、福岡市史編集委員会委員長・有馬学をファシリテーターとして、改めて西島伊三雄さんのお仕事の数々、ひいてはその存在が、福岡の人々が持つ「福岡のイメージ」の形成に影響を与え、それがまちのイメージに繋がったのではないかとという視点からお話いただきました。最後は雅幸さんの音頭で、西島伊三雄さんが愛した童謡「ふるさと」をご来場の皆さまと歌ってお開きとなりました。なお、この様子は特集として『市史研究ふくおか』第19号(2024年3月発行)に掲載します。

### 第18回「福岡市水道100年 水と福岡」 令和5年12月17日(日) 午後1時半～4時

上の第17回講演会では、2023年が西島伊三雄さん生誕100年とご紹介しましたが、実は2023年は福岡市の上水道事業開始からちょうど100年にも当たります。それを機に、福岡市水道局では『福岡市水道百年史』の編さんをはじめとした記念事業が行われました。そこで今回は福岡市史でも「水」にまつわる講演会を開催しました。

福岡市の上水道事業は1923(大正12)年の曲淵ダムと平尾の浄水場完成が始まりとされていますが、今回の講演会ではそれよりもっとも昔の人々が、水をどう確保し活用していたのかという視点から始まりました。このテーマの講師は、福岡市博物館学芸課の朝岡俊也さん。朝岡さんは考古分野が専門で、水道史の研究もされています。今回は、古代ローマ帝国(!)から始まる水道史と、福岡市域での水利の始まり、そして現代のダムや浄水場のような設備の痕跡などについても紹介いただきました。とくに弥生時代の水路が踏襲されて現代でも使われているお話には驚きました。

そして次はいよいよ福岡の水道史です。講師は近代の水道史・政治史が専門の大正大学・松本洋幸先生です。先生には近代水道と都市形成の関わりと、そこで福岡市水道が果たした役割についてお話いただきました。全国で進んだ明治～大正期の水道整備の軌跡を、資料を丹念に読み解くことで明らかにし、興味深いお話を分かりやすく解説いただきました。

最後は座談会として有馬委員長と、『福岡市水道百年史』編さん担当で福岡市水道事業の生き字引(?)、福岡市水道局の中野光治さんにも加わっていただき、2度の大喝水をはじめとした福岡市水道の歴史や水道史編さんの意義について、細かなエピソードを交えながら、登壇された皆さんとお話いただきました。

水不足や漏水問題にたびたび悩まされてきた福岡市ですが、上水道100年の節目により深く「水と福岡」について考えることができた、貴重な機会となりました。



当時の写真でめぐる  
ミュージックバスのルート

昭和36年発行のガイドブック『博多のすべて 昼も夜も』に掲載された解説とともに、ミュージックバスがめぐった福岡の見どころをご堪能ください！



西鉄商店街

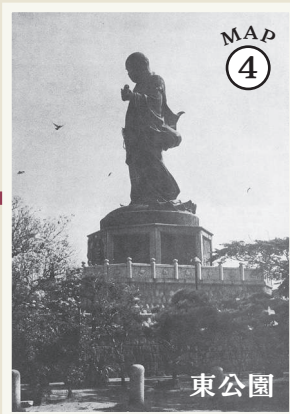


「朝は先ずコーヒーから。」



博多駅前

「人口六十八万福岡市の表玄関博多駅は明治二十二年に竣工、国鉄だけの乗降客は一日平均五万人。これに西鉄バス発着所の三万人を加えると八万人の人の波。」

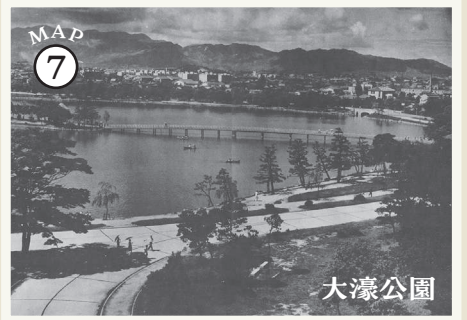


東公園

「千代の松原の一部を公園としたもので、園内には亀山上皇、日蓮上人の銅像と花壇や噴水がある。」



「女性も下駄ばきで買物に来るほど入り易いデパートである。七階建、屋上にメリーゴーランド、展望台、エスカレーター、六階は特売場で七階は食堂、地下は土産品売場、食料品売場、並びにコーヒースタンド（一杯三十円）がある。」



大濠公園

「水の公園大濠公園は、旧福岡城の外濠であったものを埋立てたもので、周囲二軒（キロメートル）、濠内の三つの島を結ぶ橋は恋のかけ橋とでも申そうか、アベックは必ずと言ってよい程、記念撮影をするところ。」



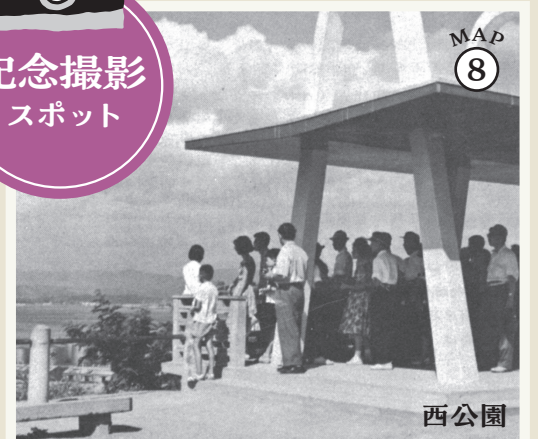
博多港 (市電築港)

「一千百余年の昔、那の大津と呼ばれ、我が国唯一の貿易港として歴史にのこるが博多港である。毎朝対島通いの出船のドラを合図に、かもめ飛ぶ岸壁で黒髪に潮風を受けて何時までも見送る若い女の後姿は港風情の一つであろう。」



平和台野球場

「かつて日本シリーズで三連覇をとげたライオンズのホームグラウンド。"おれが行かねば負ける、とばかり西鉄ファンはゾクゾクと押しかけ、度はづれの声援に微笑させられるところである。」



西公園

「万葉の古歌に詠まれた荒津山で東北西の三面は博多湾に面している。展望所から博多の市街が一望に収められ、遙か立花山、志賀島、能古島、海の中道が望まれ、バスガイドの美しい声に元寇のその昔がしのばれる。」



当時のチケット



【写真転載】『福岡市内定期観光ミュージックバス』リーフレット、冊子【出典】 脇本善一『博多のすべて 昼も夜も』（博多春秋社、1961年）  
【写真所蔵】 風月フーズ株式会社（『街中のオシャレな喫茶店』）  
【参考文献】 角田嘉久『出会いのころ』（『九州文学』第43巻第5号、九州文学社、1980年）／『最近10年の歩み』（西日本鉄道、1968年）  
／原田種夫『実説火野葦平九州文学とその周辺』（大樹書房、1961年）  
【マップ】 国土地理院1972年『福岡』『福岡西部』『福岡南部』（以上、1/25,000）、『福岡市街地図』（1951年、塔文社）を基に作成

# ふくおか 観光めぐり

「観光」をキーワードにまちの歴史を振り返ると、そこには時代の変化にあわせた精一杯の工夫と、自分のまちをどう見せようとしてきたのかが見えてきます。さまざまな「観光」に注目して、それぞれの時代で「福岡が見せた顔」を探す旅に出かけてみましょう。

## 第1回 ~高度経済成長期編~ ミュージックバスの旅

ミュージックバスとは、昭和30年代に西鉄バスが運行していた市内定期観光バス。ですが、ただの観光バスではありません。なんと車内に取り付けたテーブ・レコーダーから福岡・博多ゆかりの曲を流し、車窓の景色をいわば「動くスクリーン」化

したものの。このアイデア、実は『まぼろしの邪馬台国』で有名な作家・宮崎康平氏によるもので、長崎県営バスから始まり島原鉄道、そして西鉄が採用し、その後全国に広まりました。それではさっそく、ミュージックバスの旅にご案内します！



この国道記号は、昭和35年に制定されたよ！

管崎宮ではみんなで下車して記念写真を撮るよ！



箱崎水族館は九州初の本格的な水族館。明治時代の開業から昭和43年まで、管崎宮大鳥居（平成30年解体）のそばにあったよ！



西部ガス工場は、隣の九州製糖の工場とともにピユースポットになっていたよ！

箱崎水族館

管崎宮



東公園の龜山上皇像と日蓮上人像は、明治時代から福岡のランドマークだったよ！

東公園

博多湾岸の埋立は、この時代まだまだ途中。これからさらに埋立が進み、港の規模も大きくなっていくよ！

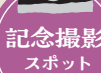
博多港

博多港には昭和39年に「博多パラダイス」が開業。とくに内藤多伸設計の博多ポートタワーは人気スポットになったよ！



西公園展望台からは、博多湾とこれまでめぐってきた福岡市内の中心部が一望できたよ！

西公園



スタート & ゴール 地点

大丸デパートは開業から昭和50年に現在地に移転するまで、呉服町交差点（現在の呉服町センタービル付近）にあったよ！

大丸デパート



2代目博多駅

博多駅は昭和38年に現在地に開業するまで、現在の地下鉄祇園駅近くにあったよ！

博多駅

天神町中心部は岩田屋をはじめとして、天神ビル、西日本ビル、福岡ビル、朝日ビルなど、7~8階建の高層ビルが建ち並ぶ最先端のエリアだったよ！

天神町

① 西鉄商店街

西鉄名店街

岩田屋

⑥ 平和台野球場

福岡城跡

大濠公園周囲の道路は当時は自動車も通れる一般道で、バスも走っていたよ！

大濠公園

気象台

昭和30年代の 約2時間 ミュージックバスのルート



## 「市議会史」ってどんなもの？

「明治以降の福岡市の歴史を調べるには、どの本を参照するのが良い？」というご質問には、『福岡市史』とあわせて『福岡市議会史』という本をご紹介します。『福岡市史』とは、昭和34(1959)年～平成10(1998)年にかけて編さんされた、現在の市史編さんとは直接は繋がらない別の事業でつくられた市史で、明治時代以降の行政史を中心とした本です。『市議会史』は議会事務局が中心となって、現在も編さんが続いています。

どちらも明治以降の福岡に関する資料集なので、同様の出来事が登場することも多々あるのですが、今回はかつて福岡市民に時刻を知らせていた「午砲」(通称「ドン」)について、それぞれの本の記述を比べてみたいと思います。

「ドン」とは、正午に空砲を発射して時刻を知らせた大砲のことです。福岡では明治21(1888)年から昭和6(1931)年まで、「ドン」が使われていました。電波時計やインターネット回線、テレビ、ラジオがなかった時代、この「ドン」が市民にとって重要な時間の基準となっていました。この「ドン」の設置場所について調べると、本によって異なる記述がなされています。

まずは『福岡市史 第一巻 明治編』(昭和34年)を見てみましょう。この本では大正5(1916)年9月の新聞記事を基に「ドン」設置の経緯を整理しています。ソースとなっている新聞記事は広く参照されており、郷土誌をはじめとした後年の書籍等でも多く取り上げられています。

この新聞記事によると、午砲の設置場所は「須崎裏→西公園山上→西公園下の波止場と変遷していった」となっています。

次に『福岡市議会史 第一巻 明治編』(昭和43年)の記述で「ドン」の設置場所を見てみましょう。この本では資料として市議会の議事録のほかに、「ドン」の事業者が市議会に提出した書類を基にしています。

それによると、「西公園山上で号砲を開始(明治21年7月)→号砲を福岡市に寄付し須崎の旧砲台に移転(明治25年3月)→北湊町波奈市有地に移転(明治31年3月)」となっています。

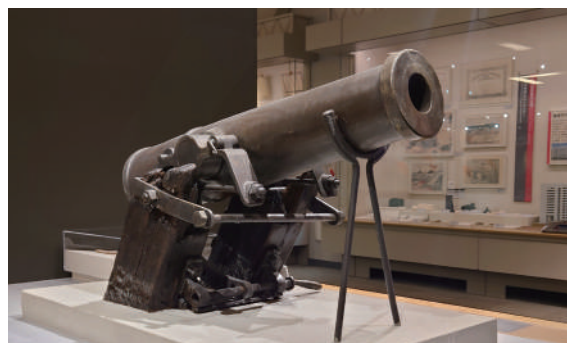
一方、本誌第13号でも「ドン」について紹介したことがあります(「コラム歴史万華鏡/始まったころの号砲は日の出と正午の二回だった」)。この記事のソー

スは『福岡市史』でも『市議会史』でもなく、明治時代の新聞記事をつぶさに拾ったもので、こちらは『市議会史』の記述とほぼ一緒でした。

このような本による記述の違いは、基となる資料の性質によって生じたものです。『市議会史』で資料としているのは当事者が作成した書類ですが、『市史』で引用した新聞記事は、大正時代に取材された「思い出話」が基になっています。

もちろん、後年の新聞記事や思い出話がすべてダメ、間違っている、ということではありませんが、事実関係を調べるには、まずはなるべく同時代の一次資料に当たるとするのが基本です。

『市議会史』は貴重な一次資料を基に作られており、明治以降の福岡市の歴史を調べるにはとても有効な手がかりです。今日では古い記録や新聞へのアクセスもしやすくなり、以前よりも複数の資料の確認が可能になりましたが、『市議会史』はより正確な一次資料へたどり着く近道として活躍しています。



▲明治36年から昭和6年まで使われていた午砲(福岡市博物館所蔵)

### お詫び

「市史だより Fukuoka」第26号に下記の誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

- ・p2 上段9行目【誤】昭和元(一九二五)年→【正】昭和元(一九二六)年/中段7行目【誤】慶長八(一六〇二)年→【正】慶長八(一六〇三)年
- ・p12 福岡市史への歩みの歩み(年表内)平成12年【誤】518万3000円→【正】581万3000円
- 【表紙の写真】2行目【誤】昭和2(1926)年→【正】昭和2(1927)年

### 表紙の写真 立花山から市域を望む [立花山山頂]

立花山は標高367m、市内からアクセスできる手近なハイキングコースとしても人気です。今号特集の写真撮影のため登ってみることに、2月下旬、下原の登山口から入山すると、思ったより険しい山道が続いている上、中旬の雨の影響で地面がぬかるんでいました。初心者にはひやっとする場面もありましたが、なんとか1時間ほどで登頂すると、山頂には期待通り、博多湾を一望できる景色が広がっていました。条件のよい日には小呂島が見えるそうです。新羅を展望しようとしたという伝承はさておき、古代の人々も私たちと同じように、山頂に登って海のかなたを見渡していたのだと思うと、感慨深いものがありました。

福岡市史についての最新情報はこちらから。「市史だより Fukuoka」のバックナンバーも見られます！  
福岡市史ホームページ ▶ <https://www.city.fukuoka.lg.jp/shishi/>

福岡市博物館の情報はこちらから。

福岡市博物館ホームページ ▶ <http://museum.city.fukuoka.jp/>

Printed in Japan.

Copyright by Fukuoka City Museum

本誌掲載の写真・図版・記事などの無断転写・転載を禁じます。